

二宮尊徳における人間 学的根本問題

—人間存在の逆説的二重性—

下 程 勇 吉

目 次

一 天地の開闢と人間の生成	八 順徳の系列と逆徳の系列
二 「二間」 ^{にげん} としての人間	九 道心と人心
三 偏倚的存在としての身体我	十 勤道と畜道
四 身体的生命維持のための人道	十一 儉と吝、業と欲
五 身体我克服としての人道	十二 奪道と讓道
六 脱体現成の人道	十三 「人に勝つ学問」と「己に克つ学問」
七 「光の子」と「闇の子」	十四 結語

一 天地の開闢と人間の生成

二宮尊徳は、「万物発言集」の名のもとに収録されている幾編かの思弁的小編において、天地の開闢と人間の生成を論じている。その際、尊徳自身がその天地開闢・人生生成を論ずるにあたり、方法論的に構想力による思弁的立場に立つことを明確に自覚し、そのことを次のごとくことわっている。

「しかりといえども、何をもって今の世に生れて、古しえを見知るべきいわ

(天地開闢の昔)

れなし。今の形をもって画きたるまでなり。もっとも、今日に居て、明日を見知るべきいわれなけれども、昨日をもって思慮するに同じ。また今の世に居て、古しえあるいは後世などという文字を書くに似たり」(全一、341)。

先ず「万物発言集草稿」も「百種輪廻鏡」とともに天地開闢論から筆を起すのであるが、後者がその冒頭に「それ元、一円空極なり」(全一、242)と書き起すのに対し、前者の一は「それ元、一円渾沌なり」と記し、ついで「渾沌清濁して天地となる、日月あらわれて、昼夜を分つ、雲発して雨を降す、風発して雲を散じ、しこうして未だ地開けざる万歳、天津神の御世ともいうなるべし」(全一、338)と、天地開闢説を展開している。この点に関しては、後者の二は次のように述べている。「天地開け、日月あらわれ、雨降り風吹き、寒暑往来して数百万歳の間、天の恵みを地いまだ受けること能わず、天地の間、天の気一行一体なり、これによって世界を天神七代と名づく」(全一、339)。さらに後者の三も、次のごとくのべている。「天地開闢して、日月道を行くのみ、人間はいうに及ばず、草木鳥獸虫魚いまだ生ぜざるときは、天地の間に何一物もなし。一物もなければ、一円日月の世界なり、これこれを神代とも云うべき哉、しかあれば、天朝をはじめ奉り、あらゆる国、日月の照したまわるところ、これみな神国なり」(全一、340)。この一文とほとんど同じ文が「百種輪廻鏡」にも記されて(全一、242)、

いにしえは草木も人もなかりけり

高天原に神留座

と詠じられている。「一円空極」にして「天の気一行一体」の「一円日月の世界」は、「天津神の御世」「天神七代」の世界として、「神国」である。まさに「一円空極」「一行一体」の「天の気」こそは、万物を産み出す空極根源として、「元の主」であり「元の父母」であり、その宇宙的限定として、人間その他の生きとし生けるものがそこから生まれるのである。「一行一体」の天の「^(命)霊命」によって、万物は生み成される。かかる「一行一体の天の気」より発する「陽の恵み、雨露のしたたれによりて」、先づ地上に^(草)苔を生じ、ついで草を生じ、さらに竹木を生じ、その潤いによって、虫魚、さらに

は鳥獸、ついには人間が天地の間に生れたのである(全一、338、542、244)。

「金毛録」はその第一頁を「大極の図」として一円空の図をのせ、「万物の化生、大極をもって元とせざるなし、^(日本書紀)伝に曰く『天地いまだ陰陽を割たず、渾沌として^(たまご)鶏子のごとしと云う』(全一、7)としているが、「一体三行録」には、「聞察の及ばざるころ、これを名づけて無極と謂う。聞察の及ぶところを名づけて、一元というなり、空風火水地これなり」(全一、198)とある。すなわち「思慮の及ぶを太極といい、思慮の及ばざるを無極という」(夜、99、語、304)のであって、一切の限定をこえた一円空の「一円相」「一円空極」(全一、244)が無極であり、それが一円相・一円空極という場合の「一」によって限定せられたものが、太極である。金毛録の「太極の解」に曰く、「それ本、一円太極なり、太極すでに一元となす。太極一元と本その号を獲るにあらず。すでにこれを^(なづ)命るや、今なり。その体を推し^(た)権れば、空ならざるにあらず、無ならざるにあらず。有体ならざるにあらず、無体にあざるにあらず、有気ならざるにあらず、無気にあざるにあらず、人力をもって観察及ばざるをもって、ただ一を^(なづ)一と号け、元を元と号するのみ、これを太極と謂う」(全一、22)。すなわち、一円空の無が一元的限定に入った太極は、その内に気味を宿し、空風火水地を蔵しているのであるが、天保4年9月20日の日記には、太極に先んずる無極よりの人間及び万物の生成を次のごとく説いている。「一円空を無極という。無極のうちに気味あり、昼夜年々、和して、ために流れず、これを空風火水地と云う。風火、動上をなして、陽体となり、天と云う。水土、下止して、陰体となり、地という。陽体・陰体、止極をなして、止まらざるごと万代、天地開闢と云う。これ世界なり。その内に、人間鳥獸畜類草木、一切万物生ず」(全一、526)。無極の一円空のうちに、渾沌として卵のごとき気味動く一元太極の場を現じるところ、清の気上りて陽空の天となり、濁の気下りて陰空の地となりて、天地開闢し、天地というその二極の間に「^(二)二間」としての人間が一切の生物とともに生れたことは、体氣偏満を論ずる著述の「一元図」「一元体図」「一元気図」「天地開闢之図」(全一、65-68)に示されているところである。

その際、特に注目に値することは、人間の生成に関して、尊徳が第一に身体の成立をあげていることである。「悟道草書帳」の冒頭に曰く、「それ元空一円一体、いまだ開けざる天地往来なし。天地を開きて、身体生ず。身体あれば、心その中にあり。心あれば、往来その中に発す。身体を發し、しかして万世に至り、往事来事なきこと能わず、これ天理自然というなり」(全一、417)。またさらに次のようにも説かれている。「それ元一円一元なり、一元の清濁、天地をなす。未だ天命を得ざれば、体気なし。天命を得て、自然に体を受く。体を受くる者は、自然に気を発す。天命を得て、万世に至り、体気變満して万世に至り、体気變満なきことあたわず、これを天理自然と謂うなり」(全一、417、426)。天地開闢して、人間がその間に現れるとは、先づその身体が生れることであり、その身体の生成は「天命を得て自然に体を受くる」ことであり、「体を受くる者は自然に気を発し」、「体気變満して」やまぬのである。実に人間の身体の生成は天命によるものとして、その底に深く天という宇宙的限定がひそむのである。

二 「二間」としての人間

実に万物は「天地を父母として」(夜、158) 生れ出るのであるが、とくに人間は「一行一体」の「天の氣」を享け、天を「元の主」とし、「天の氣は下りて土中を潤し、地の氣は上りて空中を潤す」(全一、244) 間に、天と地という二つのものの中に立つ主体となるように、天命をうけて生れたのである。「易経」七巻を天保2年4月金二朱で購入している尊徳は(全一、928)、「易経繫上傳」の章句をふまえて、次のごとく書き残している(全一、384)。「人間は天地の中央に居りて、曰く、(以下易経原文)仰いでもって天文を觀、伏してもって地理を察す、この故に幽明の故を知る。」人間はかかる主体として、天地という二つのものの中に生れ出るのである。この点からして、尊徳独自の表現によれば、「人間」は「二間」なのである。すなわち人間は、草木虫魚鳥獸とともに、天地という二つのものの中に生れて、しかも「仰いで天文を觀、伏して地理を察する」二間的主体なのである。「語録」330に曰く、

「天地の間に生ずるもの、人類鳥獸虫魚草木みなこれを二間に二間という。すなわち人間なり。」さらに「見聞記」27に曰く、「人間という字、案ずるに、二間の間違なるべしと思えり。如何となれば、二というは、天地とわけたるなり。しからば、天地の間が二間なり。さらば、二間は人ばかりにあらず。鳥獸・草木ともに、二間なり。人とさすときは、人なり。ただ両方の間なり。その所は、天にあらず、地にあらず、また天にあらざるはなく地にあらざるはなし、論ずべからず。人も父母の間に子供生るなり、父にあらず、母にあらず、また父にあらざるなく、母にあらざるなし、両方の徳は、合体して生るなり、しからば、二間なるべし。」さらに尊徳は次のように書きとめている。「天地の間、無にして生じ、有にして滅す。天にあらず、地にあらず、生滅して尽きざるものは、みな二間に二間というなり。人のみ人間に人間というにあらざるなり。元來、天の下、地の上、雲行き雨発し、草木鳥獸虫魚、一切万物、これすなわち天地なり。天間地間という心なり。」「父にあらず、母にあらず、父体母体の間、生死して尽きざるものは、我なり」(全一、413)。まさに天はその陽の氣を地に「貸し渡し」、地はその陰の氣を天に「貸し渡し」、その「間」にあらゆる生命の不止不転の流が生ずること、「彼の山にあらず、此の山にあらず、山の間流れて尽きざるを滝川と謂う」(同上)と、一般である。人間の根元は、天にあらず地にあらず、一円空極の場を上下周行してやまぬ「一行一体」の「天の氣」そのものである。「人間という根元は、天にあらず、地にあらず。天地の間に生ずるものを二間と名づくるものなり。本來、草木虫魚鳥獸および人、天地の間にあるものは、二間に二間なり。今は人のみ人間と謂うなり」(同上)。「一行一体の天の氣」に充ちた「一円空極」の超越的な永遠の場において、天地開闢し、天の氣が地に下り、地の氣が天に上る二つの流の極の間に、二間的存在として、清濁陰陽の渦巻くままに、その身体的生命を得たものが、人間である。人間の身体は、かくて天の氣の流と地の氣の流とが上下順逆相即相制して形づくった一つの渦巻であるともいわれるであろう。

三 偏倚的存在としての身体我

かくして天地二つの間に生れた人間の身体の生成を説くものは、「金毛録」の「天地開闢生死之解」である。曰く、「それ元、一円の体気なり。体気配して、陰陽となる。未だ陰陽を剖たざれば、すなわち陰陽の来往なし、来往なければ、必ず身体なし。身体なければ、心気なし。心気なければ、身体なし。来往配して身体あり。身体あれば、心気あり。身体あれば、生死あり。一生あれば、一死あり。一死あれば、一生あり。十死あれば、十生あり。陰陽生死、増減なし。天地開闢して不朽に^{いた}格る。これを天理自然と謂う」(全一、25)。身体も天地陰陽の気的大海、すなわち一元無にして地水火風空の気味を宿す一元大極から「天地の気」を受けて生れたのである。「万物発言集草稿」に曰く、「我が体は、我が気をもって作ること能わず、父母の気をもって生ず、父母の気は祖父母の体より生ず、祖父母の気は、天地の気をもって生ず。天地の気は、昔より万代まで昼夜を分たずなきこと能わず云々」(全一、353)。まさに身体は「天地一円の気」よりして生じたのである。

かく陰陽上下する「天地の気」は、「一元相」(全一、244)において、「氣、自在に遍満して通ぜざるところなく」(全一、250)、「無常、無常にあらず、有常、有常にあらず、……これ全く不生不滅不止不転の世界」(全一、246)といわれる「一元一寿」の場に住し、そこから人間の身体も生れ、

寿と我は水と魚とに異ならず

寿命は水よ我は魚なり

と詠まれるのである(全一、248)。天地一円の気または寿と人間の身体とは、水と魚にたとえられるとともに、氷と桶にたとえられるのである。「語録」321に曰く、「音は空に満つ、故に物、物に触れば、すなわち五声八音を生じ、しかして止めば、すなわち空に帰す。……^(寿命)寿もまた然り。人生るれば、すなわち^(寿命)寿あり。人死すれば、すなわち空に帰す。なお桶を造りて、水を容るがごとし。桶破るれば、すなわち地に帰す。故に、音と寿とは、開闢以来^(天地の間)両間に満つるなり。」その寿については、「悟道草案」に次のごとく云われて

いる。「寿はたとえば海水のごとく、体はたとえば桶器のごとくなり。且つ桶器ありて水あるにあらず。水ありて、桶器を作ることあるなり。^{あきま}過りて桶器を破るときは、すなわち突然にして元の海に帰るなり。また海水ありといえども、桶器なければ、すなわち自由をなすこと能はず。故に桶器は破ることあるも、海水は損することなし。人もまた然るなり。体ありて寿あるにあらざるなり。寿ありて、自然に身体生ず。しからばすなわち寿命は身体の内外に住す云々」(全一、423)。また次のごとく詠まれている(全一、869)。

因縁熟するに遅桃あり

桃栗三年柿八年

氣と体と生きてはたらく人の寿は

樽につめおく水の重さよ

ここで、人間の身体的生命の根源の場としての寿なるものが、海の水になぞらえられていることは、万物の根源を水に求めたターレスの哲学や生命の発祥を海洋に求める近代科学の立場と一脈相通するものがあるともいえようが、農耕の哲学者二宮尊徳においては、「元の水」とか「寿の海」とかいうものは、深い意味をもっているのである。

かくて人間の身体を含めて、万物は天地間に遍満する一元寿の偏倚の限定として生れる。「天地ありて、陰陽あり。陰陽循環して、寒暑生ず。寒はすなわち凝^{こわ}互極まり、暑はすなわち炎熱極まる。たとえば黄豆を盤上に転ずるがごとし。偏重によりて、万物生ず云々」(語、271)といわれ、また「甘辛の味におけるや、甘きはますます甘く、辛きはますます辛きは、偏なり。偏ならざれば、その真味を保つ能わず云々」(語、168)。「偏によりて、万物生じ」(語、271)、「偏ならざれば、その真性を保つ能わず」(語、168)といわれるところに、一元遍満の天地の気または寿の海から生れながら、その偏重態として魚や桶にたとえられるのが、人間の身体である。いわゆる「天の分身」として生れたのが、人間の身体生命である。

四 身体的生命維持のための人道

したがって、宇宙に遍満する「寿の海」そのものとして「形なくして万物を恵む」天そのものという大宇宙に比すれば、一定の形をとり一定の色に染めなされた小宇宙としての人間の身体は、微弱にしてつねにその生存を脅かされる有限にして不安定な存在である。人間の身体的存在は、天道自然のままに委せておけば、すぐとその生存の危険に脅かされる脆弱そのものの存在である。すなわち人間は「風雨定めなく、寒暑往来する此の世界に、毛羽なく鱗介なく、裸体にて生れ出て、家がなければ、雨露が凌がれず、衣服がなければ、寒暑が凌がれず」(夜、2)とも、「人体の柔弱なる、雨風・雪霜・寒暑・昼夜・循環不止の世界に生れて、羽毛鱗介の堅めなく、飲食一日も欠くべからずして、瓜牙の利なし。故に身のために便利なる道を立てざれば、身を安んずること能わず」(夜、181)ともいわれるのである。そこに、天道自然の成り行きに対抗して、衣食住の営みを一日も怠らぬ人為作の人道にいそむることが、極力高調せられ、「人界に居て、家根のものを坐視し、道路の破損を傍観し、橋の朽ちたるをも憂えざる者は、すなわち人道の罪人なり」(夜、7)といわれるとともに、動物は飽食すれば、すぐ眠り込む畜道に止まるが、人間は眼前の凡情をこえて、よく過去に鑑み、将来に備えて現在に勤勞し、三世観通的目的的に行動するところに、その身体的存在を維持する営みとしての人道を全くするのである。すなわち

我というその大元をたずぬれば

喰うと着るとの二つなりけり

喰えば減り減ればまた喰うせからしや

ながきたもちのなきぞこの身は

という身体的現実よりして

腹くちく喰うて搗(臼をつきひく)きひく(女子等は)尼かかも

仏にまさる悟りなりけり

と詠まれ、「我が腹に食満つれば、寝て居るは犬猫をはじめ心なき物の常情

なり。しかるに食事をすまずと、直ちに明日喰うべき物をこしらえるは、未来の明日の大切なることをよく悟る故なり、この悟りこそ人道必用の悟なれ」(夜、116)といわれるのである。ここから尊徳は天道に「半ば逆らう」人道の立場を力説してやまないのである。

五 身体我克服としての人道

かくのごとき身体的現実よりして、「我食す、故に我あり」という人間学に立つ尊徳は、またそこから自己の身体的欲望がつねに自己中心的に偏倚することを併せて洞察して余すところなかったのである。天地一円の気または寿の偏倚態として生れた有限の我が身は、天道自然として我が身中心の利己心を宿すのである。「人道は人の便宜を計りて立てしものなれば、ややもすれば、奪心を生ず」と「夜話」177にあるが、「夜話」6に曰く、「天理と人道との差別をよく弁明する人、少し。それ人身あれば、欲あるは、すなわち天理なり。田畑へ草を生ずるに同じ。堤は崩れ、堀は埋まり、橋は朽ちる、これすなわち天理なり。されば、人道は私欲を制するを道とし、田畑の草を去るを道とし、堤は築き立て、堀はさらい、橋はかけかえるをもって、道とす。このごとく、天理と人道とは格別のものなるが故に、天理は万古変ぜず、人道は、一日愈れば、たちまちに廃す。されば、人道は勤むるをもって尊しとし、自然に任ずることを尊ばず。それ人道の勤むべきは、己に克つの教なり。己は私慾なり。私慾は、田畑にたとえれば、草なり。克つとは、この田畑に生ずる草を取り捨つるを云う。己に克つは、我心の田畑に生ずる草をけずり捨て、取り捨て、我心の米麦を繁茂さする務めなり。これを人道と云う。論語に『己に克ちて礼に復る』とあるは、この勤めなり。」天の気の偏倚態としての我が身体には、利己的な「我欲」または「情欲」が宿り、それが自己の天分を超えて、驕慢安逸奢侈の天道疎外道に奔せらるのである。「夜話」4にも曰く、「それ人道は人造なり。されば、自然に行わるところの天理とは、格別なり。天理とは、春は生じ、秋は枯れ、火は燥けるにつき、水は卑きに流る。昼夜運動して、万古易らざる、これなり。人道は、日

々夜々人力を尽し、保護して成る。故に天道の自然に任ずれば、たちまちにた磨れて、行われず。故に人道は、情欲のままにするときは、立たざるなり。たとえば、漫々たる海上、道なきがごときも、船道を定め、これに依らざれば、岩にふるるなり。道路も同じく、己が思うままに行くときは、突き当り、言語も同じく、思うままに、言語を発するとき、たちまち争いを生ずるなり。これによりて、人道は、欲を押え、情を制し、勤め勤めて成るものなり。それ美食美服を欲するは、天性の自然、これをた矯め、これを忍びて、家産の分内にし随わしむ。身体の安逸奢侈を願うも、また同じ。好むところの酒を控え、安逸を戒しめ、欲するところの美食美服を押え、分限の内をし省いて、有余を生じ、他に譲り、向來(將來)に譲るべし、これを人道というなり。」まさに天道一円の気の偏重態としての人体には、自然に自己中心の「我慾」または「情慾」が宿り、ここに「人体より出たる僻道」(夜、114)よりして人は美食美服を求め驕慢安逸を事とし、その分度を守るところか、その天分をこえて、他を侵し、他を奪う奪道に奔り、

ちうちと鳴き狂るいける声きけば

雀の地獄鷹の極楽

きうきうと鳴き叫びける声きけば

蛙の地獄蛇の極楽

という地獄相を現成するに至り、人は畜生道に墮するのである。それに反して、かかる身体我中心の意必固我的人道を超えて、さらに進んで寛裕溫柔の天の一円仁の心に帰入するとき、人道は「我が身の元」としての天の徳に報いる天人一貫の脱体现成の人道となるのである。自己中心的な意必固我的人道から天人一貫的な脱体现成の人道への深化発展こそは、二宮尊徳の生涯の根本問題であったのである。

六 脱体现成の人道

「天地の氣」をうけ、「天命を得て、自然に体を受け」た人間は、その身体的生命を維持するために、衣食住を全くする人道を一日も怠ることはでき

ない。そのためには、天道自然に身を委ねるのでなく、天道に「半ば逆らい、半ば順いつつ」、身体的生命を維持する人道に「欲をおこして」勤めねばならない。しかし「欲に随いて家業に励む」人道も、「人身あれば、欲あるは、天理なり」といって、身体我の欲を恣にし、強欲貪禁止まるところを知らず、他人を搾取して憚らず、ついに禽獸と類を共にするとき、それは本来の人道ではなく、畜道をこえて奪道に墮するが故に、かかる我が身中心の「欲を制して義務を思う」「己に克つ」身体我克服の人道に進まねばならないのであるが、さらに天命を得て「天の分身」としてその身体を享けた人間は、百尺桿頭一步を進めて、十方刹土に全身を現わし、「天より自然に下し給える人々」(全六、86)に各々「その身その身の立つところ」を会得せしめるように、天から与えられたこの身を「元の主」の天に還元し、天の一円仁の心を体し、人々のために尽す天人一貫の脱体现成の人道に生きねばならないのである。

ここに二宮尊徳は、(一)身体生命維持の人道、(二)身体我克服の人道について、(三)脱体现成の人道を「我が畢生の覚悟」として説くのである。すなわち天より生れ出た我が身は、天に帰り、天とともに行く捨身事(天につかえる)天の人道が「人道を発して天道を粧い飾る」のである。後程詳しく論じられる「夜話」10に曰く、「親の子における、農の田畑における、我が道に同じ。親の子を育つる(我が子が)、無頼となるといへども、養育料を如何せん。農の田を作る、凶歳なれば、肥代も仕付け料も、みな損なり。それ此の道を行わんと欲する者は、此の理を弁うべし。吾、はじめて小田原より下野の物井の陣屋に至る。己が家を潰して、四千石の興復一途に身を委ねたり。これすなわちこの道理に基づけるなり。それ(松田)積氏は、生者必滅の理を悟り、この理を拡充して、自ら家を捨て、妻子を捨て、今日のごとき道を弘めたり。ただこの一理を悟るのみ。それ人、生れ出でたる以上は、死することのあるは、必定なり。長生といへど、百年を越ゆるは、稀なり、限りの知れたることなり。天(おまじ)というも、(わづか)寿(ながい)というも、実は毛弗の論なり。たとえば、蠟燭に大中小あるに同じ。大蠟といへども、火の付きたる以上は、四時間か五時間なるべし。されば、人

と生れ出たるうへは、必ず死するものと覚悟をするときは、一日活きれば、すなわち一日の備、一年活きれば、一年の益なり。故に本来我が身も無きもの、我が家も無きものと覚悟すれば、あとは百事百般みな備なり。予が歌に
 仮りの身を元の主に貸し渡し

民安かれと願う此の身ぞ

それ此の世は、我れ・人ともに僅かの間仮りの世なれば、此の身は仮りの身なること、明らかなり。元の主とは、天を云う。この仮りの身を我が身と思わず、生涯一途に、世のため、人のためのみを思い、国のため、天下のために益あることのみを勤め、一人たりとも、一家たりとも、一村たりとも、困窮を免れ、富有になり、土地開け、道橋整い、安穩に渡世のできるようにと、そのみを日々の勤めとし、朝夕願ひ祈りて、怠らざる我が身である、という心にて詠めるなり。これ我が畢世の覚悟なり。我が道を行わんと思う者は、知らずんばあるべからず。」

すなわち天地一円遍満の氣を享けて、その偏倚局限態として身体を与えられた人間は、その身体生命を維持する衣食住中心の人道を天道対立的に営まねばならぬが、その際、自己中心的身体我の赴くままに奔れば、天道疎外の極、没落するのほかはないから、身体我克服の人道に勤めるとともに、百尺棹頭一步を進めて、「我が身の元」の天に「仮りの身を貸し渡し」、天の一円仁の心を体し、「天から自然に下し給える人々」の生活を全くする全き意味の「天の分身」として生きぬく天人一貫的脱体現成的人道に至り、天の徳に報いるべきである。ここに、二宮尊徳70年の生涯を貫く「畢世の覚悟」があったのである。

これを要するに、「元の水」とも「寿の海」とも「一円空極」とも「一元」ともいわれる「天」の限定により、その氣をうけて身体を与えられて、天地の間に「二間」として生れ出た人間は、天地の氣の偏倚態としての身体的生命を維持するための人道を一日もはなれ得ないかぎり、天道に「半ば背いて」主体的に勤めねばならないが、それと同時に、その天より与えられた「体にせがまれ」、我が身中心的に「情欲のままにするとときは」、人道は「人

体より出たる僻道」としてついに畜道・奪道に墮し、天・人ともに許さぬものとして「立たざるもの」となるが故に、我欲の迷を去り克己復礼よく「我が身の元」としての天の心に帰り、その徳に報いれば、「上、天命に配し、下、人心に合する」（語、126）天人一貫の人道が成立するのである。かくして、天より享けた我が身は、「天の分身」として天から疎外し天に背く「闇の子」ともなれば、よく「天の分身」としてのその身を全くし天に帰一し、天の徳を体現する「光の子」ともなり、人間の身体はかくて「臭皮袋」ともなれば、「道器」ともなり（道元）、「不義の器」ともなれば、「義の器」ともなる（パウロ）のである。「臭皮袋」「不義の器」として行動するところに、成立するものが、逆徳の道であり、「道器」「義の器」として終始するところに、現成するものが、「順徳」の道である。以下、このことが明かにせられるであろう。

七 「光の子」と「闇の子」

このように明暗・順逆とその人生行路が大きく分れるのは、一はその身を得るときの天命に随い、他はその天命に背くからである。すなわち天命という人間の身体的生命の超越的根柢を自覚し、その命ずる性に随うならば、人は「光の子」として報徳溯源の道を歩み、天道人道相和し、天人合一的な境地を享け得るのであるが、その逆に、天命という超越的根柢を忘却し、その命ずる性に背き、「闇の子」として、驕慢放縱の道を行き畜道・奪道に奔るならば、没落滅亡の淵に墮ちるほかはないのである。ひとしく天命をうけて、その身体を与えられながら、天命を忘却し天命から疎外し、文字通り「天の分身」として「人体より出たる僻道」の赴くままに天命背反の道を辿り、畜道・奪道に赴くとき、それは「大体を受けたるものは、大体に任せ、小体を受けたるものは、小体に任せ、角あるものは、角にまかせ、牙あるものは、牙に任せ、その受け得たる所の力量に任せ、己が口服を養うのみにして、譲り施す心なき故に、耳目口鼻手足羽毛にいたるまで、^(かたち)象兼備をなすといえども、その賤い薄情にして賤しきこと、言語に述べがたし」(全一九、

48) といわれる獣類に伍し、驕慢没落の道を急ぎもするのである。尊徳自身は赤貧洗うごとき天涯の孤児として出発し、よく渾天尽地全存在の徳を体認して、人間究極の在り方として報徳溯源の道を自覚し、自己本来のアイデンティティを徹底的に確立し得ただけに、周囲の多くの人々が彼とは逆のコースにおいて驕慢没落の一路を辿るのを見て、次のように語らずにはいられなかったのである。「秘稿上」136に曰く、「それ、農商など富家の子孫に産まるる者は、業とするとところなし。貧家の者は、富を欲するが故に、業とし勤むるところあれども、富家の子孫は、たとえば、山の絶頂に居るがごとくなる故、登らんと欲するにも、登るところなく、前後左右みな下りなり。書を学ぶとも、学問するとも、みな然り。ただこの道のみ、長く富貴を保って危うからざるの道なり。もし富家の子孫として、この道を外にすれば、千万人分の富も、馬糞うんちと異ならず、季候にしたがって生じ、また季候にしたがって滅す、生ずるといえども、世界の用をなさず。」かくて「天命を弁えず」して「我意を押し張る」驕慢に終始するとき、「如何なる権力者も、天には決して勝つことはできず」して、必ず没落するのである。かかる天人分裂的驕慢没落道を辿った人物として、三幣又左衛門・川崎孫右衛門等のごとき黒闇天的剛愎漢があげられるであろう。

それに対し、よく天命を弁え、天の命ずる性に随う功德天的存在として生きぬくならば、己本来の面目を青色青光赤色赤光的に現成し、その天真流露の如是相を呈露するならば、その真情よく自他共感的に天道に通ずること、天保4年9月4日の日記に趣き深く切々と示された鹿の姿のごとくであろう。「さて鹿は、元より山に生れ、山に住むべきものなれば、山に住むがよし。山に住んで、天地自然にまかせて、春は青めく草葉を食い候えば、色（総身）ふき変り、惣身美しく相成り、男鹿は女鹿をうつくしきを見、恋しい、女鹿は男鹿のうつくしきを見て、恋しい、楽にまかせて、願わずして鹿子をもとむ。これ万代子孫相続の道あり。秋は秋の山に居て、天地自然（の）につれて、四方草木もこぼわり、年一周する（た）（に）したが、かなしみの心おこり、親は子をおもい、子は親をおもい出し、夫は妻をおもい、妻は夫をおもい、相

互いに真意の情を尽し、その実情天地に通ずるを、

奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の

声きく時ぞ秋は悲しき

と猿丸大夫の感心せられしも、むべならざらんや」（全一、523-4）。まさに天命随性の道に徹して各自の超越的根柢の場において各々円成のアイデンティティを実現するとともに、瓦擬瓦融の共感的関係をあますところなく現成するところ、「上、天命に配し、下、人心に合する」ものである。かかる報徳溯源の道を歩んだ人物としては、富田高慶・斉藤高行等をあげ得るであろう。

これを要するに、天命背反的黒闇天的驕慢に終始する畜道・奪道の帰結は、

ちうちうと歎き苦しむ声きけば

鼠の地獄猫の極楽

きうきうと鳴き叫びける声きけば

蛙の地獄蛇の極楽

の道歌（全一、871-2）に示され、天命随順的功德天的報徳道の天人道相和す帰結は、

天上天下唯我独尊

天地の和して一輪福寿草

咲くやこの花幾世経るとも

氣の二つ和して一輪福寿草

咲くやこの花幾代ふるとも

の二首（全一、879）に示されるといわれよう。

ひとしく「天の分身」として天命をうけ、その身体が与えられながら、人間は一方では天命背反的黒闇天的驕慢没落道にはしり、他方では天命随順的功德天的報徳溯源道を歩むのである。前者の場合には、人間の身体は「臭皮袋」とも「不義の器」ともいわれ、後者の場合には、それは「道器」とも「義の器」ともいわれるのであるが、前者の場合には、天地一円の気は偏して、意必固我の塊となり、後者の場には、「仏の字は、ほとけるの意ならん」

(秘上、150)といわれるように、内外一円の気は遍して、寛裕溫柔の心となるのである。前者は天道疎外的天性背反的類落的なマイナスの方向であり、後者は天道帰一的天性随順的建設的なプラスの方向である。過去現在未来の「三世観通」の因果系列を説く「三世観通悟道伝」の用語にしたがって、天道疎外的天性背反的マイナスの方向の因果系列は「逆徳」の系列と名付けられ、天道帰一的天性随順的プラスの方向の因果系列は、「順徳」の系列と名付けられよう(全一、333)。

八 順徳の系列と逆徳の系列

尊徳は当時の社会の興亡盛衰ただならぬ人々の千様万態をつぶさに見とけて、草木の因果輪廻系列からはじめて、人間の善悪・明暗・順逆の因果系列をくりかえして説いている。このことは道歌、「百種輪廻鏡」、天保9年改めの「天命七元図」、「三世観通悟道伝」に明らかに示されている。「天命七元図」によれば、「米の種を蒔けば、米の草を生じ、米の花を發き、米の実を結ぶ」とあり、以下、麦・豆等の五穀・野菜・草木等、百一種について、同様である(全一、286-290)。五穀草木について、それぞれの因果系列が散存するとともに、人倫の実践についても、同様である。「仁心を發すれば、仁友を聚め、仁行を尽し、仁事となる」よりはじめて、以下義礼智信等、百項について、同様である(全一、290-294)。「三世観通悟道伝」によるも、「仁心を發すれば、仁道達し、仁行を尽し、仁徳成る」よりはじめて、義礼智信等の百項について、同様である。

かかる百種因果輪廻の系列においてことに注目すべきことは、両者ともに、仁義礼智信忠孝敬の八徳以外は、みな善悪・是非・直曲・存亡・興廢・治乱・勤惰・儉奢・満欠・悟迷・実虚・順逆等々のごとく、正と反、プラスとマイナス、明暗の対を成していることである。たとえば、「天命七元図」に依れば、次のごとくである。

善心を發すれば、善友を聚め、善行を尽し、善事を為す
悪心を發すれば、悪友を聚め、悪行を尽し、悪事を為す

正心を發すれば、正友を聚め、正行を尽し、正事を為す
邪心を發すれば、邪信を聚め、邪行を尽し、邪事を為す
さらに「三世観通悟道伝」によれば、次のごとき、注目すべきことが示されている。

善心を發すれば、善道達し、善行を尽し、善徳成る
悪心を發すれば、悪道達し、悪行を尽し、悪徳成る
正心を發すれば、正道達し、正行を尽し、正徳成る
邪心を發すれば、邪道達し、邪行を尽し、邪徳成る
順心を發すれば、順道達し、順行を尽し、順徳成る
逆心を發すれば、逆道達し、逆行を尽し、逆徳成る

以下、是非・直曲・存亡・儉奢・勤惰・実虚等についても、同様である。したがって、善徳と悪徳、正徳と邪徳、順徳と逆徳のみならず是徳と非徳、直徳と曲徳、存徳と亡徳、儉徳と奢徳、勤徳と奢徳、勤徳と惰徳、実徳と虚徳等の正反両立的な徳の概念が立てられ、その前者につく順徳の方向を終始確保せんとするのが、報徳溯源の道であり、その後者にはしる逆徳の方向にひたすら執着するのが驕慢没落の道である。天地一円遍満の気をついで、有体有限偏倚の体を享けた人間は、前者の気によって生かされるときは、天地と不止不転の行を共にし、順徳の報徳溯源の求心的方向に生きぬくが、後者の身体我の欲にそそのかされるときは、逆徳の驕慢没落的遠心的方向にはしり亡びの道を急ぐのである。まさに善因善果の順徳の系列の方向と悪因悪果の逆徳の系列の方向とに、人間の人生行路は大きく分れるのである。ここに尊徳は人生の「廻り合せ」という決定的な根源的事実を見届けるのである。「夜話」44に曰く、「それ運というは、運轉の運にして、いわゆる廻り合せというものなり。それ運轉は世界の運轉に基元して、天地に定規あるが故に、積善の家(易經文言)に(必ず)余慶あり、積不善の家(易經文言)に(必ず)余殃あり、幾回旋轉するも、この定規を外れずして、廻り合するを云うなり。よく世の中にあることなり。灯燈ちようちんの火の消えたるために、禍を免れ、また履物の緒の切れたるために、災害(仏教)を免るる等のこと、これ偶然にあらざ、真の運なり。仏に云うと

(因果応報)
 ころの因応の道理、すなわちこれなり。儒道に(いわゆる)積善の家、余慶あり、積不善の家、余殃あるは、天地間の定規、古今を貫きたる格言なれども、仏理によらざれば、判然せざるなり。それ仏に三世の説あり。この理は三世を觀通せざれば、決して疑なきこと能わず、疑の甚しき、天を怨み、人を恨むに至る。三世を觀通すれば、この疑なし云々。」ここから、尊徳は驕儉・貧富等々の順逆の系列についての「三世觀通悟道伝」を二種も書き残している。

さらに日光仕法書は因果応報の理を何人も疑うべくもない数字に示しているとして、「夜話残篇」47に曰く、「それこの興復法、計算はひとり日光のみにはあらず、國家興復の計算なり。日光神領の文字、まことに妙なり。世界のことと見て、可なり。さればこの帳簿は、計算帳と見るべからず。これみな一々悟道にして、天理自然の理なり。それ天地は、昼夜交満して違ひなく、偽わりなし。しかして算術また然り。故に、算術をかりて、世界の変満するは、此のごとき道理なれば、決して油断はできぬぞと示して諫めしなり。この帳を開かば、初めの一つを何になりとも定めて見るべし。善なり、悪なり、邪なり、正なり、直なり、曲なり、何なりとも、定め置きて見るとき、元(元金)によって利(利子)を生み、利が返って、また元となり、その元に利が付き、くりかえしくりかえし、仏説に云う、因果因果と引きつづきて、絶えざること、年々歳々、此のごとし。たとえば、毎朝己れ先に眼をさまして、人を起すか、また人に毎朝起さるか、この一事にても知らるべし。人世は、一刻勤むれば、一刻だけ、一時働けば、一時だけ、半日働めば、半日だけ、善悪・邪正・曲直みなこの計算のごとく、一厘違えば、一厘だけ、五厘違えば、五厘だけ、多きは多きだけ、少きは少きだけ、この通りと、みな百八十年間、明細に調べあげたり。朝早く起きたる因縁によりて、麦が多く取れ、麦が取れた因縁によりて、田を多く作り、田を多く作りたる因縁によりて、馬を買い、馬を買い求めたる因縁によりて、田畑がよく出来、田畑がよく出来たる因縁によりて、田が殖え、田が殖えたる因縁によりて、金を貸し、金を貸したる因縁によりて、利が取れる。年々此のごとくなるによって、富有の者となるなり。しか

して、富有者の貧困になりゆくも、またこの道理なり。原野の草、山林の木の生長も、また同じ理なり。春のびたる力にて、秋根を張り、秋根を張りたる力をもって、春のび、去年のびたる力をもって、今年太り、今年太りたる力をもって、来年また太るなり。天地間の万物、みな然り。これを理論にて云うときは、種々の異論ありて、面倒なれば、予は算術をかりて示せるなり。算術にて示すときは、如何なる悟道者も、如何なる論者も、一言あらず。天地開闢の昔、人も禽獸も未だ無き時より、違ひなき物(算術)をもって証拠として、天地間の道理は、此のごときものぞと、知らしめたるなり。決して此の帳を計算と見ることなかれ。それ数は免ること能わず。この数によりて、道理を悟るべし。これ悟道の捷徑なり。弁算和尚、かたわらにありて、曰く、『これぞ真の一切経なる、仰ぐべし、尊ぶべし』と。」最初の一步の踏み出し方の正反順逆の如何が、千里の差を生ずるのである。日光仕法書が「百行動惰得失先見雛形」と名付けられた所以である。「夜話残篇」8にも曰く、「毫厘の差、千里の違ひということあり。みな人は譬と思えり。予、利倍帳を取り調べたるとき、二個年目の利(利子)に、永一文の違ひありたれば、百八十年目にいたり、一百四十一万九千八百九十五兩永二百九十四文九分五厘の差となれり。実に毫厘千里なり。譬にはあらず、実事なり、恐るべし。」

かくのごとく、はじめの一步を順徳の因果系列と逆徳の因果の何れの方向に踏み出すかによって、人生の行路は明暗截然と大きく分れるのである。「語録」107も、最初の踏み出しの一步を禽獸の道と人間の道との何れかによって、天地の差があることをつづさに説いている。しかもその何れをえらぶかについて、天道自体は各人の自由な「一心決定」に委ねるのである。その限り、尊徳は天道の超越性のみとめながら、人間のいわゆる自由意志を否定する決定論者ではないのである。この点で、尊徳は「天地広大偏ることなく、年々歳々我が好むところに倚らしむ、これすなわち事をなさんと欲する者、大いに成る者なり」(全一、888)と説くのである。天はあくまで人間をこえている広大な存在であるが、無偏の超越者として各人の好むところに倚らしめる点で、人間の自由をみとめ、天の心に即く人間には大いに為すあらしめると

ともに、天に背く驕慢の徒には、自業自得的に没落の道を行かしめるのである。この点を明確に示すものは、次の「悟道草案」の一章である。「雪、松を悪^いみ、過分に積り、折りたるにもあらず、ただ天より真正面に降り次第なり。元来、天地の生育して、天地の間に住みながら、常に天の御心に背き、肥しある方、何か勝手よき方に、我儘にのびほこりたる、私の枝に正直に降る故に、過分の重きに引かれて、枝欠け落つること、よくよく弁^わい知るべし。ついに幹とも倒るる木、沢山なり。雪も(と)あの枝を愛し、この枝を悪むの理なし。然りといえども、天の自然と私と、二つに別れたるのみなり。変と思うは、誤なり。常のままにあらわれたるのみ。天の妙々、よくよく弁^わい知り給うべし。天の妙々をよくよく弁^わい知り給うべし。風もまた竹・木はじめ家根、家・小屋・垣根そのほか吹き折れたるにあらず、常の雨露入るか、また勝手ままほこりたるゆえなるべし。右の松(と)同前^(然)に候間、よくよく弁^わい知り給うべし」(全一、480)。すなわち、天は天意随順の道を行く順徳の光の子には「大に成る」ことを得させるが、天意背反の道を行く驕慢我意の闇の子には、没落の道を進らせるのである。その間、天意随順の順徳の道をえらぶか、それとも天意背反の道につくか、その何れを人がえらぶかについては、天は各人をして「我が好むところに倚らしめ」、その「一心決定」に委ねるのである。

天保8年の駿河国御厨郷中への教訓は、「返えすがえすも云う通り、粟を蒔けば、粟が実のり、米を蒔けば、米ができ、善き種蒔けば、幸が実のる、悪き種蒔けば、害実のるは、天の誠の道、これを誠にするは、人の道なりとは、報徳のことなり」(全三六、1110)と説いて、「その富貴貧賤は、一心一念の変化するところなり」(全三六、1111)と結んでいる。まさに「順心を発すれば、順道達し、順行を尽し、順徳成り、逆心を発すれば、逆道達し、逆行を尽し、逆徳成る」のである。順徳と逆徳との対立は、また善徳と凶徳との対立としても云いあらわされる(秘上、233)。「見聞記」51にも曰く、

善の種をまけば、善の草生えて、善の花咲きて、善の実結ぶ

悪の種をまけば、悪の草生えて、悪の花咲きて、悪の実結ぶ

かかる順逆・明暗・善悪の相対立する系列の何れを人生行路においてえらぶかは、各人の「一心決定」の問題である。天道は「天地広大無偏、年々歳々、我が好むところに倚らしめる」とともに、人道はその一心決定によりて順逆・善悪・苦楽とりどりのコースを進ること、「苦と楽の花咲く木々をよく見れば、心の植し実の生えしなり」(全一、861)と詠まれるがごとくであるが、その一心の決め方如何によって、その人の人生行路の順逆明暗が大きく分れることを尊徳は次のごとく克明に記している。「それ人として道に志し厚き者は、その身その身の生れ得たるところの家業を尽し、祖先の丹誠を尊敬し、みだりに家居を動かさず、慎しみて修復するのみ。常に麩飯^(糲)を食い、魚服を着、古風を好み、分限を約し、金銀米銭を貯え、自然天理にかなう。この輩^(人々)においては、家政の暇あるときは、徳ある人を愛し、善人を招き、古人の金言を聞き、他人の善を集めて、我が善心の友とし、もし貧賤あるいは無道の人來れば、威儀を正して教養し、潰れたる家を取り立て、荒れたる田畑を開き与うれば、人の悦び慕うこと、暗夜に燈を得るがごとし。これこれらの人はおのずから願ひ求めずして日月の憐れみをこうむり、世人法の元の神と尊敬し奉り、上は、天下国家を治め、万民を安んじ、官位所領財宝、下は、家族妻子を撫育し、子孫繁昌する者多し。至孝の自然、その源は志深く道を行う故なり。また曰く、人として道志なき者は、その身その身の生れ得たるところの家業を怠り、安きに居てうまきを食らい、花美なるを着、祖先の堅守^(不十分)を不及に思慮し、愚意に任せ、家居を飭り、異風を好み自然と分限を失い、目前の美をよしとす。この輩においては、家政の暇あるときは、^(よくない人) 倅人を招き、虚礼を愛し、虚言をきき、他人の非を求めて、我が非の友として寵愛す。もし貴位道勤めの人來らば、幼童の雷火を恐るるがごとし、気色を転じ、容体を改め、善言を述べといえども、悲しい哉、胸中を推察に預かること、白日に高山の姿を誹謗せらるるに似たり。これら人、上は官位所領財宝、下は家株田畑山林家居、その身に備わりたる富貴を捨て、困窮にせまり、あまつさえ他の富貴を求めんと欲するのみ。終に妻子を道路に立たせ、家を亡ぼす者多し、不孝の至り、その源は道勤めなき故なり。本来同志遠隔

なることを悟りて、共に共に勤行いたしたきことに候」(全一、1144-5)。すなわち順心による順徳至孝の報徳の道と逆心による驕慢不孝の没落の道とが明暗の対照鮮かに示されている。

九 道心と人心

上来辿り来った人間生成論をうけ、以下の行論も含めて、人間の順逆の人間行道系列を図式的に示せば、次のごとくなるのである。

天地遍満の氣——円空——無量の寿(海水)・(水)——道心——金剛界の
大日如来
分身偏倚の体——局限態——有限の寿命(桶器)・(魚)——人心——胎蔵界の
大日如来
体より離れ空より出る心(水入れの水)——善因善果(順徳の系列)——報徳溯
源の道
身体より生ずる私心(硯の水)——悪因悪果(逆徳の系列)——驕慢没落の道

すなわち善因善果の順徳的系列を動機付け、報徳溯源の道を貫く一心は、天地遍満の氣の「空より出る」心としての「道心」であり、密教的に云えば、(衆生本具の心徳仏性)金剛界の大日如来の心であり、悪因悪果の逆徳的系列を動機付け、驕慢没落の道に導く一心は、分身偏倚の体^(凡夫の肉団心)にせがまれて出る私心としての「人心」であり、密教的に言えば、胎蔵界の心である。前者は「空より出る心」「心の心」「人の神魂について生ずる真心」といわれて、色づかぬ無色透明の(水滴)「水入れの水」にたとえられ、後者は、「体より生ずる心」「体の心」「身体について生ずる私心」といわれて、黒や赤などの色のついた硯の水にたとえられている。この問題は報徳学の人間学的基礎につながる根本問題として、尊徳はいろいろ説いている。「秘稿上」67に曰く、「それ、心は、^(仏教)仏にては、金剛界の大日といい、胎蔵界の大日という。^(儒教)儒にては、人心道心という。あるいは金胎両部の大日、あるいは人心道心というは、硯の水といい、水入れ^(なり)というの違いたり。たとえば、道心は水入れの水なり。人心は硯の水なり。本来、水に赤・黒なし。朱にせがまれて、赤くなり、黒にせがまれて、黒くな

るなり。心、元来善悪なし。体^(相対的な善悪)にせがまれて、善・悪・生ずるなり。暑といい、寒という。患といい、楽という。みな体より生ずるなり、これを体の心という、すなわち人心なり。体なければ、何もなし、これを心の心という、すなわち道心なり。たとえば^(水をためる桶)天水桶の水、ぼうふらは生滅して、水は生滅なきがごとし。」これとほぼ趣旨を同じうする「語録」258に曰く、「仏經にいわゆる金胎両部の大日とは、何を謂うや。儒にいわゆる道心・人心これなり。心はな^(水滴の水)お水のごとくなり。しかして以って、道心・人心の異なるものありとなすは、^(硯の中の水)な^(朱と一しよになる)お書滴水の硯池水のごとし。硯池水はすなわち朱の和するところ、赤となり、^(墨)墨の和するところ、黒となる。しかして書滴水もとより赤黒なし。心性もとより悪なし。ひとり身体^(心)の欲するところ、悪となる。熱を苦しみ、寒を悪み、逸を喜び、楽を好む、みなこれ身体より生ずるものなり、これを胎蔵界の大日という、すなわち人心なり。もし身体^(心)の欲を去らば、すなわちなお書滴水のごとく、何の悪かあらん、これを金剛界の大日という、すなわち道心なり。」道心とは、特定の色に染められる以前の明浄透徹——円空の「元の水」の心である。

遍満一円空の道心と偏倚一辺倒の人心とは、かくして相對峙し、概念的形相的に區別せられて、前者は順徳の系列を動機付け、報徳溯源の道を開通させ、後者は逆徳の系列を動機付け、驕慢没落の道を現成させるのであるが、この順逆両コースは明暗の別裁然と対立し平行するものではなくて、「語録」164に「明中暗あり、暗中明あり、明屋豁目して私欲を懐^(お)い、悪意を長ず、これ明中に暗あるなり、暗夜瞑目して是非を思い、善悪を弁ず、これ暗中に明あるなり」と(あるがごとく、順逆交々明暗双々に交錯し、力動的にからみあい、時として明の道心が暗の私心によって危くされること、稲田が莠草^(ひえ)によって危くされるがごとくである。この点について、「夜話」133は、次のように記している。「人の神魂について生ずるを真心という、すなわち道心なり。身体について生ずるを私心という、すなわち人心なり。人心はたとえば、田畑に生ずる^(ひとり)莠草のごとし、勤めて^(と)去るべし。しかせざれば、作物を害するがごとく、道心を荒すものなり。勤め私心の草を耘り、米麦を培

養するがごとく、工夫を用い、仁義礼智の徳性を養い育つべし。これ身を修め家を斉うる勤めなり。」すなわち道心を荒らす人心の克己復礼的克服が力説されるのである。

この点については、「秘稿上」224に次のごとく明確に説かれている。「体より出づる心は、私欲より発する故、正しからず。たとえば、荒地に草の増長するがごとく、体あるものは、この心なきことあたわず。その心をほしいままにるときは、鳥獸と同じくして、人道亡ぶ。書にこの心を戒めて、人心と(書経)いい、仏にこれを胎藏界の大日と称す。農夫の草をとるがごとく、勉めて引き去るべし。しかして体を離れて空より出づる心、これ私欲を離れて、仁とし、義とし、礼とし、智とし、信とす。この心、万事に依じて、人道ここに立ち、人世安泰を得るの処なり。書にこれを道心という。仏に金剛界の大日(たがやす)という。農夫の耕耘するがごとく、勉めて広むべきなり。それ圃は勉めて耕耘すといえども、草生じて、止まず。故に『人心は危し』といえり。荒圃を墾開して耕土とすといえども、年々勉耕少しく怠れば、すなわち元の荒蕪(荒地)に帰す。故に『道心これ微なり』といえり。故に、重分(十分)の力を出して勉強し、もって自然に荒蕪して止まざるの人心を押し止めて、微なる道心を広むる、これを人道の至要という。』

放っておけばいくらでもはびこる雑草のために、田畑が荒地になるごとく、「体にせがまれて生ずる」人心のために、道心はつねに危殆に瀕するのである。そこから「人心惟れ危く、道心惟れ微なり。惟れ精、惟れ一、尤にその中を執れ。四海困窮せば、天禄永く終らん」という書経の語を冒頭にかかげて、尊徳は「語録」182で次のごとく説いている。「至れるかな、言や。これを一村一家にたとえれば、すなわち自家の便利を計るは、人心なり。この心つねに生じてやまず、これをこれ危うしという。己を儉し、人に推すは、道心なり。この心、たまたま生ずるも、またこれを厭忌す、これをこれ微(分微)という。故に我が分を精察し、田録百石を有つ者は、専一にこれを守り、その半をもって家事(家計)を經理し、その半ばを譲り、もってこれを人に推す。いやしくもかくのごとくせば、すなわち一家一村必ず安泰なり。もしそれ各々自家

の便利(たくまし)を、日に奢侈怠惰に流るれば、すなわち村をあげて月に窮し、(田畑)段田の産する粟(穀物)、次第に「減じ、終に荒蕪に帰し、一村一家の田禄、永く終らん云々。」勤譲よく道心に就けば、天禄を維持できて安泰であるが、怠奢にふける人心に流されるならば、天禄を失い没落するのみである。

かくて、道心に就くか、人心に流されるかは、人間の運命の明暗興亡をわかつ根本問題である。しかるに人心惟れ危く、道心惟れ微にして、身体我に発する人欲の猛焰は良心の紐帯を焼きつくすばかりである。この点からして、「語録」39は「天理の水を灌いで、人欲の火を制すべし」と説くのである。曰く、「水火の日用におけるや、切(きわめて大切である)といえども、火はそ(勢)の然るに任かせば、すなわち災となる。これを節しこれを制し、もって烹任(料理)の用をなすなり。水もその流るるに任せば、すなわち害となる。これを防ぎ、これを堰(せき)し、もって灌溉(田にそそぐ)の功をなす。しかれども、そのこれを節し、これを堰するは、その性に反す。その性に反せざれば、すなわちその功用をなす能わざるなり。人の行事(実行)におけるも、また然り。情欲の好むところに反し、その悪むところを勤めれば、すなわち事必ず成る。情欲の悪むところを去り、その好むところを為さば、すなわち事必ず敗る。何となれば、その悪むものは、道心なり。しかしてその好むものは、人心なればなり。書に曰く、『人心、惟れ危く、道心、惟れ微なり』と。何をか人心と謂う、形体(身体)に発して、人欲に出るもの、これなり。これを荒蕪に譬う。雑草を芟夷し、墾(新田)きて畝(新田)となす。しかれども雑草日に生じ、まさに復た蕪れんとす、あに危からざらんや。何をか道心という、形体をはなれて天理に出づるもの、これなり。これ良田に譬う。深く耕し、もって粟を種(穀物)えるも、また耘耨(耕作)を務めざれば、荒蕪に帰す。あに微ならざらんや。しからばすなわち惟れ危きの人心を治め、惟れ微なるの道心を広むるには、よろしく当に良農の耕耘を務むるごとくすべし。これ我が心田の荒蕪を墾開するを先務となす所以なり。我が道を行く者は、よろしく人欲の火を制し、天理の水を灌ぎ、もって心田を治むべきなり。』形体に発する人心の火が、形体を離れて天理に発する道心を焼きつくそうとするとき、よく自反自省人心の猛火を消しとめるものはひと

つ「天理の水」であるといわれるのである。

かくて自己自身の道心が、よくその「天理の水」によりて、自己自身の心に燃えさかる人欲の業火を消しとめる自反自省こそ、第一の急務であると説く尊徳は、他人を教える教育の場合も、この自反自省からはじめねばならぬとするのである。「語録」45に曰く、「人を箴めんと欲せば、すなわちすべからく先づ自ら警しむべし。先づ我が道心をもって、我が人心を警しめ、我が人心肯んぜば、すなわち人を箴しむべきなり。それ道心と人心とは方寸の間に雜り、しばらくも相離れざるものなり。しばらくも相離れずして、これを警しめ、なおかつ肯んぜずんば、たとい人を箴しむるも、それは誰かこれを肯んぜん。かつ我が人心の酒色における、我が身を亡ぼす所以なり、しかして沈湎荒耽、あえてこれを箴めず。あにただ箴しめざるのみならんや、その人心に阿り、淫蕩止まざるは、惑えるの甚しき者なり。人よろしくその惑を弁じ、各自道心をもって人心を警しむべきなり云々。」さらに齊藤高行と席を同じうして、この講話を聴いたと思われる福住正兄も、「夜話」37において、次のごとく記している。「蒲賀の人、飯高六蔵、多弁の癖あり、暇を乞うて国に帰らんとす、翁諭して云う、汝、国に帰らば、決して人に説くことを止めよ。人に説くことを止めて、己れが心にて、己れが心に異見せよ。己れが心にて己れが心に異見するは、(斧の柄) (詩經の言葉) 柯を取りて柯を伐るよりも、近し。元、己が心なればなり。それ異見する心は、汝が道心なり、異見せらるる心は、汝が人心なり。寝ても覚めても、坐しても歩行ても、離ることなき故、行住坐臥、油断なく異見すべし。もし己れ酒を好まば、多く飲むことを止めよと、異見すべし。速かに止めばよし。止めざるときは、幾度も異見せよ。そのほか驕奢の念起るときも、安逸の欲起るときも、みな同じ。百事かくのごとくみづから戒めば、これ無上の工夫なり。この工夫を積んで、己が身修まり家齊いなば、これ己が心、己れが心の異見を聞きしなり。この時にいたれば、人、汝が説を聞く者あるべし。己れ修めて人に及ぶが故なり。己れが心にて己れが心を戒しめ、己れ聞かずば、必ず人に説くことなかれ云々。」かくて、人は濁りなき「元の水」にたとえられる天賦の道心に帰るために、濁った「硯

の水」にたとえられる身体我から出る人心を超克せねばならぬのである。今市の祭の見世物に頭は猿で体は人間の怪物があったと語った福住正兄に対して、尊徳はずばりと「貴様等、頭が人間で、心が獣なり、よく注意せよ」と云ったので福住も赤面した由である（留岡幸助日記Ⅱ、412-3）。

十 勤道と畜道

これを要するに、人間の生活は、順徳と逆徳、微なる道心と危き人心、報徳溯源道と驕慢没落道等の逆説的渦巻である。いたるところこれらの明暗双双順逆交錯の渦を巻いているところに、人間生活の現実がある。これらの逆説的渦巻のよって来る根源は、天地遍満の氣と偏倚有形の体との逆説的統一としての身体そのものにある。尊徳が鋭く徹底的につきとめたごとく、人間生活のあらゆる問題のよって来るところは、衣食住の三つを一日として欠き得ぬ人間の身体そのものである。人間はその身体を養うために、稲を作し米を得て食べる勤労をいわゆる人道として営まねばならぬのである。これは、身体を天地遍満の氣の有限偏倚の体としてもつ人間として、自然の道である。尊徳はこの道を「天道の自然」として、次のごとく説いている。「身を勞し田を耕し、田を耕し稲を植え、稲を植え米を得て、米を喰い体を養い、体を養い寿を保つは、天道の自然なり」（全一、392）。一日も食を離れ得ず、食いだめもできぬ身体を天から与えられている以上、その身体を養うための勤労は、その限り、当然なすべきこととして「天道の自然」といわれるのであるが、その勤労はあくまで主体的な「人作の道」であって、放っておいても草が生え茂るような「自然の道」ではない。身体を養うための勤労は、人間として一日も廃すべからざる人道に属しているが、動物になると、空腹を満たすとすぐ眠りこけてしまい、明日にそなえて勤労するということはない。これがいわゆる「畜道」である。「夜話」5に曰く、「人の賤しむところの畜道は、天理自然の道なり、尊むところの人道は、天理に順うといえども、また作為の道にして、自然にあらず、如何となれば、雨にはぬれ、日には照られ、風には吹かれ、春は青草を喰い、秋は木の實を喰い、有れば、飽くまで喰

い、無きときは、喰わずにいる。これ自然の道にあらずして、何ぞ云々。」すなわち動物は「眼前の風情」のままに奪い食し、腹に満ち足りたら、眠りこけるだけで、腹をこしらえた上で、明日の生活にそなえるために、勤勞をし、その成果を将来に譲るいわゆる自讓の道を知らない。このようなその日ぐらしの生活は、動物と類を共にするものとして、畜道である。「米を見て直ちに米を得んと欲する者は、盜賊鳥獸に等し。人たる者は、須らく米を蒔きて後に米を得べし」(全一、407)。かかる畜道は、「体より生ずる心」として「人心」から出るものである。それに対して、現在腹に満ちるほどたべても、三世観通的に明日にそなへ家族全体のために、眠りたい心に克って、勤勞するのは、「人の神魂より生ずる真心」としての道心にもとづくのである。ここに「眼前の風情」という人心に支配される畜道という逆徳の系列に対して、三世観通の地平に立つ道心にもとづく勤勞中心の人道という順徳の系列が対立的に立てられ、やがて、その最初の一步の方向の撰択の差は、万里相隔たるものとなるのである。

「語録」107は、天道自然の禽獸の道と人道勤行の人間の道との順逆的左右的対立について、次のごとく説いている。「天道と人道とは、あに異なるなからんや。循環自然は、天の道なり。専ら作為を務むるは、人の道なり。天道自然に随って生息し、稼がず、穡めずして、秋の実のりを争うは、禽獸なり。天道自然に逆らって耕耘し、稼穡に務めて、秋の実のりを食むは、人道なり。善なるかな、稼穡の道、粟を一粒播けば、すなわち秋の実のり千倍す。茄子のごときは、すなわち万倍す。人の衣食は、これに頼る。もしそれ懶惰に日を消し、稼穡に務めずして、もって秋の実のりに飽かんと欲せば、これ禽獸の心ならずや。そもそも人と禽と道を異にするは、これを兩脚に譬う。人道を左脚となし、禽道を右脚となす。まさに關を越えて出でんとするや、先ず左脚を出す者は、人道を履む。先ず右脚を出す者は、禽道を走る。千里の遠き、霄壤の差、またこの二脚に過ぎざるなり。その一たび關を出るに及びては、すなわち左右混行して、誰かよく人禽を弁ぜん。人・禽の二道混乱すること、久し。余、天道と人道の異なる所以を明らかにし、もって人・禽の二道

を分ちて説く。人よくこれを弁別して人道を履み、禽道に走るなかれ。」まさに最初の一步において、人道と畜道との何れかを踏むかによって、順徳の系列と逆徳の系列とが天地の差をもって大きく別れるのである。まさにその故に、「悟」と題して(全一、891)、

(一ばい) (白をつきひく)
腹くちく喰うてつきひく賤の女は

仏にまさる悟りなりけり

とまで詠まれるのである。

人心または獸心にもとづく畜道は、「天道の冥慮」にそむく「小人の道」であり、道心にもとづく勤道は、「天道の冥慮」にかなう「君子の道」であるとする立場からして、「大円鏡」には、次のごとく説かれている。「小人の常として、明日薪を拾いて、今日食を炊がんと欲し、もって天道の冥慮に逆らう。この故に、欲するといえども、能わざるなり、勉むるといえども、成らざるなり。君子の常として、今日薪を拾いて、明日食を炊かんと欲し、もって天道の冥慮に順う。この故に、欲して能わざるなく、勉めて成らざるなし」(全一、45)。人心にもとづく畜道は「天道の冥慮に逆らう」逆徳の系列を生み、道心にもとづく人道は「天道の冥慮に順う」順徳の系列を生むのである。

二 儉と吝、業と欲

その日ぐらしの「畜道」は、消極的退嬰的であるが、それも人心に出るものであり、それは一転すれば「腹くちく喰うてつきひく」順徳的正業の域をこえて、意馬猿心強欲驕慢の逆徳的行動に走るのである。もともと順徳の系列としての「人道は中庸を尊む」(夜、3)のであるが、「人体より出たる僻道」(夜、114)、「人私の僻道」(秘上、127)といわれる逆徳的契機をもつ人道は、「体にせがまれる」ままに、中庸の分度を越えて、自己の欲を無際限に追求する逆徳的越境行動にはしるのである。

それだけに、中庸の分度に止まる儉約・正業と奪道にはしる吝嗇・強欲との間に一線を引き、はっきりその両者を区別せねばならぬわけである。尊徳

は儉吝の区別の必要性を次のように「秘稿上」233において説いている。『尚儉撮要』に儉吝の可否をいへども、いまだその境を詳らかにせず、また可否をいいて後、これを尽さず。儒者の書を著わす、みなこの類なり。もし儉吝の可否を言わんとならば、その境を詳らかにし、何をか儉、何をか吝、儉は善徳、吝は凶徳と明弁して、人々、儉を勤め、吝をなすべからずと、辞を払いて記して可なり云々」と説き、さらに「秘稿上」232においては、次のように説いている。「万石の収納を得て、五千石を約して、金帛を空しく庫倉に蝕亡す、これを吝というべし。もし万石の半ばを約するとも、用うるところあらば、何ぞこれを吝といわん。禹の宮室を卑しくするは、力を溝洫に尽すがためなり。釈尊の天下を捨つるは、万民を育せんためなり。何ぞこれを吝といわん。然らば、己がために約す、これを吝といい、人のために約す、これを儉という。近くたとうれば、ここに餅一つあり。これを半ばして、友人とともに食す。何ぞこれを吝といわん。もし一つの餅をあるいは二分し三分し、半ばあるいは半余を^か置いて、ついにすえて食うべからざるに至る。これ吝にあらずして、何ぞ。」

かくて「己がために約す」のが、吝であり、「人のために約す」のが儉であるという立場から、「人に遣わすものは、早く出すべし」とまで説かれるのである。「秘稿上」261に曰く、「出納に吝なる、これを有司という」とあり。人に遣わすものは、早く出すべし。証文いまだ出来ずとも、遣わして可なり。謬っても、人は救うべし云々。」天下太平のときにも、変にそなえ、治国安民の道を全くすることを念とした尊徳は、「秘稿下」36において、彼の立場に対する世上一般の皮相な批評に次のごとくこたえるのである。「人々皆曰く、『我が道、^(儉約)約を専らにす』と。約を専らにするにあらず。変を補わんがためなり。曰く、『我が道、財を積む』と。財を積むにあらず、国用をなさんがためなり。^(察信篇)論語に曰く、『飲食をうすくして孝を鬼神に致す云々』と。よくよくこの理を味わい、儉と吝とを弁別して、吝畜に陥らざるよう、心用うべし。」

このように、儉と吝との区別をはっきりさせる必要を説く尊徳は、それと

同じ精神からして、^(強欲)「欲」と^(正義)「業」とを分つ分度を「畔」(田の間の境界)と名づけて、次のごとく述べている。「世にいわゆる欲と業とその境を詳かにせず。欲とは、何ぞ。分外を営む、これを欲という、業とは、何ぞ。分内を営む、これを業という。畔内を刈る、これを業といい、畔外を刈る、これを欲という。世人畔を立てずして、欲を論ぜば、^(いくら時間をかけても)日を尽すといへども、弁すべからず。もし畔内を樹植耕獲するを欲とせば、居室に入りて雨露を凌ぐことを如何。人生れて、羽毛なく、雪雨を凌ぐあたわず。故に、居室をつくりて安居す。これ人倫の業、何ぞこれを欲といわん。人生れて、草食すべからず。故に米粟を作りて、^(たいてたべる)火食す。然らば、畔内(の田)を耕す、人倫の業なり。何ぞこれを欲といわん。しからば、すなわち欲と業とを論ぜば、畦畔をきめて後、論ずべし。畦畔をきめれば、論ぜずして、明らかなり。もし畦畔をきめずして論ぜば、たとえば、二人稲を刈り豆をこく。^{(どちらか)(ぬすと)}何れか、盗、何れか、^(自作人)自、見て分らざるがごとし」(秘上、211)。すなわち身体の維持にあたる営みとしての「業」は、畦畔すなわち分度の域を守る限り、いわゆる家業として、正当なものであるが、その分限を超えて際限もなく自己中心的に財を貪り驕慢驕奢にはしるのは、「欲」であり、いわゆる強欲として、やがて天人ともに許さざる奪道にはしり畜道に陥り、没落滅亡を免れぬのである。この「業」と「欲」とを明確に区別するところに、尊徳が俗流尊徳解釈の通り一遍の勤儉貯蓄家と類を異にする所以があるのであるが、「夜話残篇」23もまたこの区別を「家業と欲」との区別として次のごとく説いている。「世人、家業と欲とを混じて、その弁別を知らざる者あり。故に家業を出精するを欲深しと思うなり。大なる誤というべし。家業は出精せねばならぬものなり、怠りては、すまぬものなり。欲は、それとはちがい、押えねばならぬものなり。それ人みな家の業あり。官吏の国家のために尽力するは、家業出精なり。教師の教育に勉強するも、家業出精なり。僧侶の戒律をよく守るも、家業出精なり。医師の病者に心力を尽すも、家業出精なり。農工商、みな同じ。よく心得て、思い混うべからず。」家業は励むべく、欲を押しやぶべきところから、「欲に随いて家業を励み、欲を制して義務を思うべきなり」(夜、3)

といわれるのであるが、天地一円の寿の偏倚的凝集態としての身体我は、ややもすれば、天道自然の分度の^{ちやうど}埒としての正業という畔をふみこえて越境し、意必固我的に強欲の所業にはしり、この逸脱的動向はさらに激化し、正業としてこの家業という順徳系列の人道とは正反対の逆徳系列に属する畜道さらには奪道にはしるのである。ここでもその問題の根源は身体我そのものである。

三 奪道と讓道

もともと天地遍満の寿の偏倚態としての身体をもつ生物は、「天道の自然」として本性上大は小を食^くみ、他から奪う本能的性向をもつのである。「秘稿上」の165に曰く、「それ自然の道は、鳥獸虫魚、およそ生くるもの、みな食を求めて讓ることなく、ようやく鳥獸の類、親子共に食するのみ。草木に至りては、眼前松の根に生ずる松苗は、己が子なれども、己が根のとどくだけ、水を奪い、己が枝葉のとどくだけ、雨露を吸い、少しも讓るところなし。これすなわち、天道の自然、古より今に至りて、親子兄弟朋友の親しみなし云云。」「秘稿上」60にも曰く、「それ禽獸は欲するものを直ちに取^とりて、食とし、取れるだけの物を取りて、讓ることを知らず、草木もまた然り、これ天道の自然なり。」「鳥獸には、今日の物を明日に譲り、今年の物を来年に讓るの道なし」(夜、79)といわれる畜道どころか、禽獸の世界では、「大は小を食^くう、天理自然の道なればなり」(秘下、13)といわれる奪道が支配的であって、「大体を得たるものは、大体に任せ、小体を得たるものは、小体に任せ、角あるものは、角に任せ、牙あるものは、牙に任せ、その請^こけ得たるところの力量に任せ、己が口腹を養い、無礼讓のみ」(全一九、213)という修羅場をくりひろげるのであるが、人間もその身体我に駆りたてられるところ、「夜話残篇」18及び「語録」362に示された下館領内の強欲無双の精農のごとき形相を呈するのである。前者に曰く、「某村某は強欲にして積財を勤め、隣りに、艱難あるも、救わず、貧窮に陥るあるも、憐まず。金を貸すこと、酷にして、高利を食^くり、恨を村里に結んで、意とせず。その行い、は

なはだ悪^{あく}むべきがごとし。しかりといえども、その力を農事に尽すところを見るときは、^(近くに)近郷比類なし。耕種培養、時に先後せず、……^{あした}晨に起き夜半に寝て、力を農事に尽せり。その勤農、実に至れりというべし。聖賢をして農業を勤めしむるも、これに過ぐべからず。その作物のために尽せば、秋に至^{いた}つて、己に利あることを了^(わかまえる)知すること、^(釈道)釈氏といえども、またこれに過ぐべからず。もしこの理を人倫の間に用い、みづから勤めるところの農術を人に教え、郷里のために懇誠を尽さば、聖賢に^(そっくり)彷彿たらん者なり、惜いかな。この地の賢人と呼ばれんものを、惜いかな。予これを論^{まこと}ししも、悟ることあたわず、惜いかな。」

かかる強欲無双の奪道的自財絶対主義の立場に対して、尊徳自身が身をもって実践躬行したごとく、公財主義さらには天財主義の立場において讓道に生きぬく順徳的系列の道が対立するのである。

さらに政治の領域においても、眼中自己の榮達驕奢のみあって、下民を搾取する奪道を事とする逆徳の系列に対立して、また尊徳自身が力説したごとく、「極難貧者といえども、国家の大本、一家一人づつも取り立て相続いたさせ申したく候」(全一〇、832)という経国安民精神よりして人々の勤勞の徳に報いる讓道に生きる順徳の系列もあるのである。

さらに技術の領域においても、同様に明暗併立的である。すなわち眼前の我欲よりして手を抜き一時を糊塗して、あぶく銭を貧る奪道に終始する逆徳驕慢の徒もあれば、「地方普譜の儀、永年の便利に相成り、手堅くでき候よう心を尽し申すべきこと」(全一、1173)という精神よりして人々のためにつくす讓道に生きる順徳報徳の士もあるのである。

三 「人に勝つ学問」と「己に克つ学問」

さらに経済・政治・技術のような現実生活にかかわる領域よりも、精神性が高いと思われているいわゆる学問の領域においてさえ、片言隻句の末をいじくりまわして新機軸を出したと自負するような「人に勝つ学問」を事とする逆徳驕慢の徒もあれば、ひたすらに真理を追究し道理を体現するために、

危き人心を去り微な道心を長養する「己に克つ学問」を志ざし、「我が身の元」を究める順徳報徳の士もあるのである。すなわち「道を踏まんがために、修行せしにあらざ、ただ書物上の議論に勝ちさえすれば、それにて学問の道は足れりとせり、議論達者にして、人を言い伏すれば、それにて儒者の勤めは、立つと思えり」(夜、11)といわれるような、「ただ人に勝つことのみを欲して読書する」のは、まさしく学問の領域の奪道である。その心は全く「高く固き狭き心」であり、意必固我そのものである。かかる心に住して、人を教えんとする学者の醜態は、「秘稿上」164及び「夜話」71がつぶさに描くところである。

かかる逆徳驕慢の腐儒が、己の心をぬきにして人に教えんとするのに対し、「己に克つ学問」の立場に立つ尊徳は、「人に説くことを止めよ、人に説くことを止めて、己れが心にて、己の心に異見せよ」(夜、37)、「人を箴しめんと欲せば、すなわちすべからく先づ自から警しむべし」(語、45)とも説き、さらに委曲をつくして次のごとく語っている。「己を戒め、己きかば、すなわち人を戒しむべし。己を戒め、己なおきかずんば、人何ぞきかん。人を戒しめんとすれば、先づ己が心を戒しむべし。酒色驕奢は、身を亡ぼすものなることを、懇々柔和に己が心に説くべし。己が心得心して守らば、これ己一人を(一日中)教解せしなり。しかる後は、人にも説きて可なり。しかるに26時中己が心にへつらい、酒をのませ、朝寝をさせ、怠らせ、遊興させ、ざん詔面諷至らざるところなき、ああこれ何の願あって己にへつらうや。迷の甚しというべし。己と心と26時付き通しにて、守らすこともできず、戒しむることもできずんば、何ぞ人を戒しむることを得ん。しからば、己は己をいよ諫め、彼は彼を(各人)戒しめ、銘々は銘々を戒しむるときは、この道に至るなり。十人ならば、十人、天下の大幸、一兩開発、みな円をもって知るべし」(秘下、199)。「人に勝つ学問」は高き固き狭き意必固我の人心に出て、驕慢逆徳の道を行くが、「己に克つ学問」は低き軟かな広い寛裕溫柔の道心に発して、報徳順徳の道を開くのである。人に勝つ学問」を事とするものは、徒らに人の短をあばき、人を責めるのに急であるが、「己に克つ学問」は、ひたすらに己の短

を省み、己を責めるのである。「仕法掛心得書」に「一村の向背、人気の進退、みなこれ御仕法掛の一身に帰し候儀は、もちろんのことにつき、村方のよろしからざるは、村方の所為にあらざ、掛り(仕法掛)あいの至らざるところなりと、日々我が身を顧み、我が心を責めて、万事实意第一に世話さし加え申すべきこと」(全一、1172)とあるが、この実践的格率の根柢にあるものは、いうまでもなく、己を責め、「己に克つ学問」である。かかる仕法実践精神を体得し体現するために、尊徳は多年にわたる悪戦苦闘を通じて「己に克つ学問」を深め、自己のうちに宿る人心の暗黒を空じて、よく道心の一円仁の光を仰ぐに至ったのである。

六 結語

以上、天地一円に遍する気を有限局所に偏する体に受けて、天地の間に「二間」的存在として生れて来た人間は、遍の気の方向に生きて、順徳の道を脱体現成的に貫きもすれば、偏の体の方向に執して、逆徳の道を意必固我的に歩みもする明暗双々の逆説的存在である。そこから、人間は順逆・明暗・善悪等の対立を逃れぬ逆説性のある場である。上に見て来た、道心と人心、勤道と畜道、儉と吝、讓道と奪道、己に克つ学問と人に勝つ学問等の対立は、いづれも人間の気体・遍偏・明暗・順逆等の逆説的構造から出てくるのである。かかる構造からして、人間はその肉眼にもとづく「眼前の凡情」に偏して、心眼による表裏全面を観通せぬ限り、必ず我が身中心の意必固我的人道の逆徳系列に墮ちこみ、自他ともに全きを得る脱体現成的人道の順徳系列の道を歩みぬくことはできないのである。自己のみ見て他を見ぬところに、自己中心的人道が出てくるのである。しかるにもともと自他の関係は、「大円鏡」付録の「自他之図」(全一、97)が明確に示すがごとく、もともと自・他ともに半円であって、本来的には、自他相俟って全円を成すのである。「それ元、一円一体なり、一体変化して、自他となる」とも、「自なければ、他なく、他なければ、自なし。自あれば、他あり、他あれば、自あり」とも、

「自他元を悟れば、不二元一」ともいわれるごとく（同上）、自他相俟って一円をなすこと、我敵・富貴・貴賤・上下・表裏等々と同様である。すなわち自他相対しつつ一円をなすものとして、その基本構造は、以下詳論するごとく、対偶一円性なのである。一切の存在は対偶一円性をなすというのが、二宮尊徳のいわゆる一円相の哲学である。しかるにその相対する半円の一つしか見えぬのが、人間の肉眼である。肉眼に制約せられて、全体の一円を観通し得ぬのが、いわゆる「半円の見」であり、肉眼の制約をこえて、全体の一円を観通するのが、いわゆる「全円の見」である。半円の見にとらわれて、一円の全体を観通し得ぬのが、迷であり、半円の見をこえて、一円の全体を観通し得るのが、悟である。ここに真実の實踐に道を開くものとして、悟道なるものが二宮尊徳において重大な意味をもってくるのである。尊徳の哲学においては、彼が終始力説した天道と人道との関係を正しく位置付けるものとして、悟道が自づと問題となるわけである。

Anthropological Problem In Sontoku Ninomiya —Paradoxical Duality of Human Existence—

Yūkichi Shitahodo

According to the anthropology of Sontoku Ninomiya, a man is born between heaven and earth, and has as his fundamental character a paradoxical duality. This “duality” means he has both a tendency to have an “existence of light” connected to heaven and to have an “existence of darkness” connected to the earth. From this duality, there will be both a line of good virtue and bad virtue in human existence.